

# 「 家 族 」

学校法人平松学園大分東明高等学校2年 佐藤 亮太

「俺がおらんでも大丈夫やろ。新しい生活にわくわくしてまったく寂しくないわ。」

そう言って僕は家族の元を離れた。

高校に上がると同時にサッカー選手になるという夢を追うために寮に入った。別れの日には涙もろいはずの母も、いつも「にいやん」と佐藤家特有の呼び方で甘えてくる弟も妹も笑顔で見送ってくれた。本当は不安でいっぱい離れることが寂しかったが、長男としての威厳を見せるためにこんな言葉を言ってしまったのだろう。

寮での新しい生活は、初めてのことばかりで楽しいことも多かったが、それ以上に自分は家族とはなれたことに対するショックのほうが大きかった。ずっと家族と一緒に生活していたらどんなに楽しいことが待っていただろう。兄弟に会いたい。1年生の間は寮に入ったことを後悔していたが、今となってはこっちに来て本当に良かったと思っている。それは、自分にとって一番大切なものに気づくことができたからだ。

「家族＝空気」

みんなは周りであることが当たり前である空気というものに、感謝をしたことがあるだろうか。これがなくては生きてはいけない。自分達にとって一番大切なものなのに、僕たちは感謝というものをしたことがない。それは、身の周りにいつもあるのが当たり前だからである。見慣れすぎ、感じすぎることで、ない時の感覚がわからなくなって、有り難みを感じるができなくなる。家族もこれと一緒にだと思ふ。自分達には帰る家があり、そこには家族がいる。当たり前すぎて自分の大切なものはもっと他にあると思っていた。だが、寮に入り、当たり前の存在であった家族というものを失ったことで、その大切さ、本当の有り難さに気づくことができた。

ある日、家族と食事をする機会があった。僕は冗談交じりに聞いた。

「俺がおらんでも寂しくないやろ。」

すると母はこう言った。

「子供が家を出て寂しくない親なんてどこにもいない。でも亮太が決めた道だから。」

僕が家を出たあの日の夜、家族皆で泣いたという。どうしても母だけが泣き止まなかったので、父と弟でケーキを買ってきてなんとかなぐさめたらしい。それを聞いた時、僕は初めて知った。別れの時のあの笑顔は、みんなが悲しみに耐えながらも僕が不安にならないように作ってくれていたものだったということ。そして自分にとってかけがえのない大切な宝物は家族なんだということを知った。その瞬間僕ははじめて家族の前で泣いた。

今年の夏もまた帰省の日がやってきた。今までは何とも思っていなかったものにも感謝するようになった。「ああ、あるわ。」「これは有り難い。」そんなことを思いながら家族との大切な時間を過ごした。離れる時、素直な本当の気持ちを家族に伝えた。

「これからはなくなって気づくんじゃなくて、それがある時に感謝できる人間になる。やっぱり寮に入って良かったよ。一番大切なものが家族って気づくことができたから。本当にありがとう。」

家族は心からの笑顔で僕を見送ってくれた。